

公益社団法人 京都府助産師会

事業報告書

平成25年度

平成25年4月1日から平成26年3月31日まで

〒604-8493 京都市中京区西ノ京南両町33番地1

目 次

《平成25年度事業報告書》

はじめに

I	子育て・女性健康支援事業（公益目的事業1）	2
1	相談事業	
1)	事業① 無料電話・メール相談	
2)	事業② 来館個別面接相談	
3)	事業③ 無料体重・身長測定（乳幼児）	
4)	事業④ 不妊・不育等相談	
2	妊娠期・出産から育児期支援事業【シードリーフ】	4
1)	事業⑤ マタニティヨーガ&親子ヨーガ	
2)	事業⑥ サロン型ミニ講座	
3)	事業⑦ 妊婦講座	
4)	事業⑧ パパも育児のプロになる（パパプロ講座）家族のためのハッピー講座	
5)	事業⑨ 多胎育児支援（えんどう豆の会）	
6)	事業⑩ ベビーマッサージおこしやす広場（ぴかぴか）	
7)	事業⑪ 妊娠・出産・育児サポート事業（スマイルベビー）	
3	事業⑫ 多世代育児支援事業【いきいき孫育て講座】	7
4	事業⑬ 出張型性教育事業【いのちのふれ愛講座】	8
II	事業⑭ 助産師再スタート事業【潜在助産師再就業促進事業】	8
III	指導,教育,研修会事業	9
1	事業⑮ 研修会・講習会	
2	事業⑯ 支援事業担当者養成のための講座【ミドワイフ道場】	10
3	事業⑰ 学生指導・教育	
IV	事業⑱ 会議室等貸室事業	11
V	その他の目的を果たす事業 運営管理	12
1	組織の強化	
2	健全な事業運営と効果的な広報活動	13
3	助産師業務の事故防止・安全対策の充実	
4	防災活動と取り組み 災害対策委員会の活動	14
5	平成27年度（公社）日本助産師会総会・日本助産師学会の準備運営	

おわりに

（別紙1） 平成25年度ミドワイフ道場 実施項目と参加人数

はじめに

公益社団法人京都府助産師会は、公益社団法人日本助産師会との連携のもと、人々のニーズに応える助産及び母子保健領域の活動の発展を目指すことを目的に、特にリプロダクティブ・ヘルス・ライツ（性と生殖に関する健康・権利）の専門家として、安心・安全な妊娠・出産・子育てにつながる活動はもとより、思春期から更年期・老年期を含めた女性の一生のライフステージを通して幅広く対応することで、専門性の高い事業を展開した。

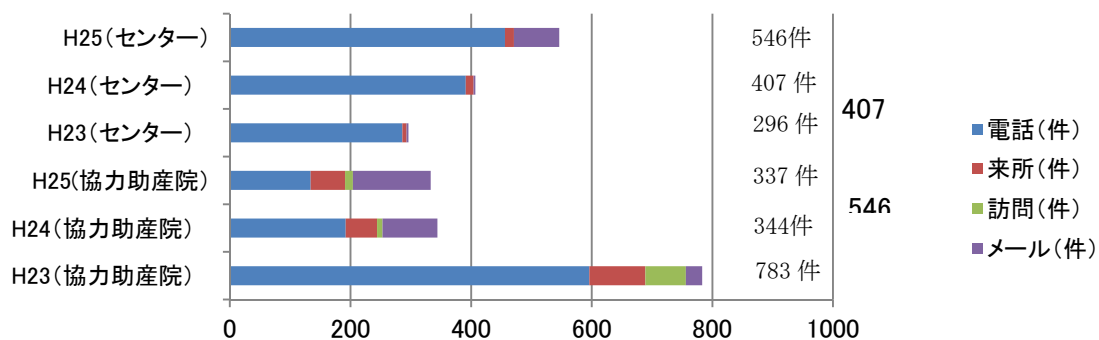
子育て困難社会といわれる状況において、親となる前の児童・青少年期や祖父母世代へのリプロダクティブ・ヘルス・ライツの普及活動を通し、地域ぐるみの子育て支援を充実、発展させていく基盤となる事業活動を報告する。

I 子育て・女性健康支援事業（公益目的事業1）

1 相談事業

1) 事業① 無料電話・メール相談：月，火，木，金曜日10時～15時 水曜日9時～16時（会館）協力助産院3件で対応した。妊娠，出産，子育てのみならず，思春期，更年期，老年期など女性の一生を通して広く相談に対応でき，必要な情報提供や訪問などへ継続して支援ができた。

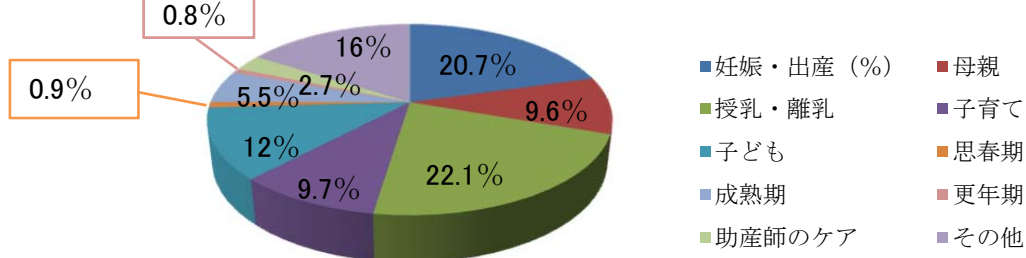
図1 子育て・女性健康相談件数



支援センターにおける電話相談件数は、前年度の17%増の456件となり、来館相談15件とメール相談75件を含むと総数546件であった（図1）。協力助産院における相談件数は横ばいではあるが、今なお会館で対応しきれない相談をサポートしてもらっている。両者ともメール相談の増加が顕著である。協力助産院では、前年度の1.4倍、H23年度の4.8倍の129件となった。

センターでの相談内容の内訳としては、妊娠・出産、授乳や離乳、母親に関することで5割強を占めている（図2）。要支援者の他機関との連携事例は7件あり、前年度より3件増加し、継続支援中である。

図2 内容別相談件数(複数回答) 総数=764



2) 事業② 個別面接相談：毎週水曜日9時～16時（会館）及び協力助産院にて実施した。会館では、年間15件と昨年より2件増加し、年度後半にかけて相談が増加した。協力助産院は4件増加

の 13 件だった。

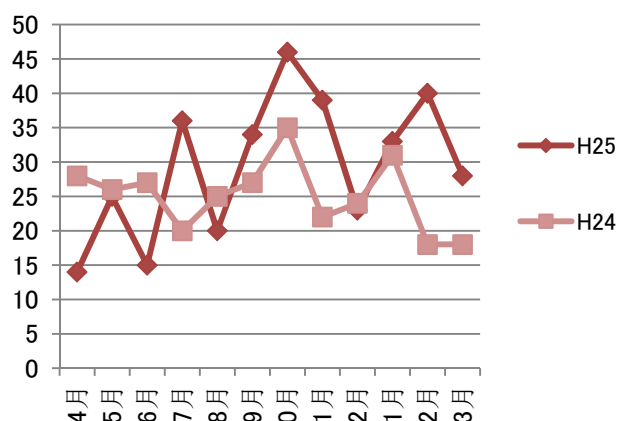
3) 事業③ 無料体重・身長測定(乳幼児) :
毎週水曜 10時～12時(会館)

平成23年12月から新規開催され、今年度は年間延べ350組の親子が利用し、前年度より16%増加した。季節や時期によって、参加者数は昨年同様変動が見られる。(図3)

子どもを連れて母親1人での初めてのお出かけから利用後のリピーターも多く、助産師はあくまでも利用者同士をつなぐファシリテーター的役割を担い、情報交換・交流の場となるように努めている。定期的に体重や身長を測定し助産師や他の親子に会えることで、育児への安心感、自分に自信を持てる機会となっている。個別相談や継続支援が必要な場合は、来館個別相談やミニ講座などへ継続している。発育・発達面から、医療機関や保健センターからの二次的な見守りやサポート的役割も担っている。

次年度からは、さらに親子のニーズに応えるために、第2と第4水曜日の午後1時～2時までを延長開催する予定である。知り合った親子同士で、4月から開始されるヨガやベビーマッサージなどの無料体験への参加も期待している。

図3 無料体重・身長測定 利用親子数(組)



年間利用者合計 H25年 350組 H24年 301組

4) 事業④ 不妊・不育等相談事業

(1) 「にんしんホットナビ」ホームページ管理運営

平成24年11月より開設された「にんしんホットナビ」(京都市委託事業)のホームページの管理運営をおこなっている。不妊・不育症等に関する悩みや予期せぬ妊娠など、妊娠に関する相談メールを24時間受け付け、受付の自動返信の後、担当助産師が返信を行った。メール相談総対応件数は80件で、連休や年末を除き、ほぼ一両日中に返信できた。相談内容は多い順に①月経の遅れや避妊の失敗、妊娠を望まない時期などの理由で妊娠しているかどうかの不安・妊娠判定時期や方法について②年齢や経済的な問題、サポートがないなどの理由で妊娠を継続するかどうか③出産場所についてであった。そのうち2件(妊娠・出産に関して)は保健センターや関連団体の相談へ連携し、継続的な支援につながることができた。ホームページへの訪問者は4月から10月は1か月250から300件余りであったが、11月以降は1か月540件余り、2月は600件を超えた。11月の虐待防止強化月間に合わせた公共交通機関への車内広告が大変効果的であった。また、ホームページはメール相談フォームへアクセスしやすいようにページの更新をおこなった。インターネット検索とチラシ・ポスター・カードの配布が認知度の上昇、メール相談件数の増加につながっている。相談内容によっては電話相談も利用して、適した他の事業や緊急を要するケースへの対応につながることができた。

(2) 個別面接相談(すずらん相談) : 第1・3木曜日①14:00～ ②15:00～(会館)
開催回数: 20回 面接人数: 13組(15名)であった。

相談には本人以外に夫が同伴されることもあり、治療についてはもちろんであるが、夫婦関係や、家族への思い、子どもが欲しいという気持ちについての相談が今年度も多かった。対象者が気持ちを打ち明けやすく、対象者に寄り添ってくれる人が少ない状況がうかがえた。印象に残った相談は、これから治療を開始しようと考えているケースと、治療よりも里親に興味があるケースであった。

今年度の相談対象は13組と昨年度よりも減少した。昨年度の総括で広報や、他団体への協力依頼のあり方を課題としたが改善に至らず、今年度も引き続き次年度の課題とする。

(3) 交流会 (すずらん交流会) : 年4回, 6・9・12・3月の第3木曜日に開催した。

不妊などに関する悩みを持つ人とその家族を対象に, 知識の普及を行う講話とともに, 参加者 (当事者女性) 同士が悩みを自由に話し合いコミュニケーションを深める場とした。

参加総人数は18名であった。昨年度より若干増加した。互いの悩みを話し共感しあい, また情報交換や個人的な交流ができる場となった。次回の交流会への参加を希望される方もあった。参加者の好評を得たため, 保健センターのみでなく各産婦人科病院・診療所等に働きかけ, 広報活動を強化して利用者増を図る必要がある。

(4) 不妊等相談事業に従事する者に対する研修会 : 年1回 (1月17日) 開催した。

テーマ「妊娠・出産に関わる夫婦・親子関係についての悩み ～症例解説・弁護士の視点から～」
講師：木下和茂弁護士

保健師24名, 助産師14名 計38名の参加であった。親権, 監護権, 認知のメリット・デメリットなど普段対応している具体的なケースを想定でき非常に参考になる講演であった。

(5) 不妊・不育等に関する普及啓発研修会 : 市民公開講座を年1回 (8月10日) 開催した。

テーマ「ここでしか聞けない精子とおちんちんの話」男性不妊
講師：市岡健太郎医師 (いちおか泌尿器科クリニック院長)

一般参加者26名, 医療従事者17名 計43名の参加があった。20歳代から60歳代まで, 男女ともにバランスの取れた参加者で, 活発な質疑応答や意見交換がなされた。当日のアンケートの結果, 印象に残った講演内容は, 男性不妊の現状や男の子の泌尿器科の病気について, 不妊治療のタイミング療法を契機のEDなどであった。

2 妊娠・出産から育児期支援事業【シードリーフ】

1) 事業⑤ マタニティヨガ&親子ヨガ : 毎週月曜日 10時～11時30分 (会館)

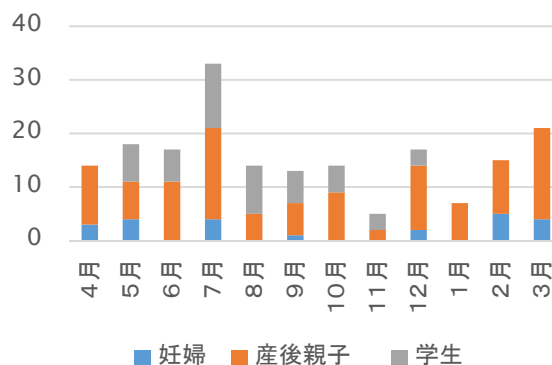
参加者によりマタニティヨガと産後ヨガをコンビネーションさせたシード・リーフ特有オリジナル版は, 自分自身の身体に向き合い心身ともに維持・増進できるようなエクササイズ, 呼吸法, リラックス法が身につけられるようにプログラムしている。

今年度は43回開催した。当会のホームページや地域での呼びかけをきっかけに参加されている。延べ参加人数は妊婦23人, 親子114組, 学生51人であった。(図4) 参加数は体調不良が原因で当日キャンセルの数も含めて昨年より妊婦・親子とも40人弱減少したので宣伝・広報活動を活発にし, 参加者増加を目指す必要がある。

ヨガ終了後は妊娠・出産, 育児に関連することがきっかけに情報交換や交流の場となり, 必要に応じて個別相談を受けた。ヨガを通して地域でのサポート体制を必要とされている現状を実感するとともに, 他の公益事業への参加推奨することに繋がったのではないかと推測している。

今年度は出張講座の依頼が4件あった。3件は児童館での親子ヨガ (2回契約) とマタニティヨガ (定期的依頼), 1件は保健所から子宮がん検診啓蒙活動を目的とした出張講座の依頼があり実施した。今後も出張講座に対応していきたい。

図4平成25年度マタニティ&親子ヨガ参加者数



2) 事業⑥ サロン型ミニ講座：ふれままサロン（妊娠, 出産, 育児など）：第1水曜 ほっこりサロン（赤ちゃんの食事-母乳, 離乳食, 卒乳など）：第2, 4水曜（会館）ちくちくサロン（作業しながら育児相談）：第3水曜 開催時間：13:30～14:30

今期3期目の開催であり48回予定したが,利用者数大幅減少となった。今年度からは,妊婦のうちからの参加者を獲得するために,赤ちゃんの育児グッズや出産関連品を手作業しながら情報交換を行う「ちくちくサロン」を新規開催したが,まだまだ認知不足のようで,参加者は停滞している。

参加者減少の要因として,開催回数を月4回に増やしテーマを参加者に合わせる方法にしたことで,参加者ニーズが不明確になってしまったことを踏まえ,次年度からは,2年前までの従来形である月2回（第1と第3のみ）に戻す予定である。第1水曜は「離乳食」「卒乳」などテーマを設定した「ふれまま」あるいは「ほっこりサロン」,第3水曜は今期通り「ちくちくサロン」を継続する。参加費は利用しやすいように1コイン（500円）に値下げし,参加者増加を見込む予定である。

表1 平成25年ミニ講座（ふれままサロン, ほっこりサロン, ちくちくサロン）参加者数

サロン	H25				H24			
	妊婦(人)	産後(組)	祖母	計	妊婦(人)	産後(組)	祖母	計
ふれまま	2	0	0	2	5	10	1	16
ほっこり	1	13	0	14	0	17	0	17
ちくちく	1	2	0	3	-	-	-	-
計	4	15	0	19	5	27	1	33

3) 事業⑦ 妊夫講座（沐浴実習+妊婦体験+ミニ交流会）

前年度より新規開講。男性（パートナー）が,妊娠中から積極的に妊娠・出産・育児に関わる機会を作り,女性をサポートすることができるような出産準備教室である。行政では対応しきれていない土日祝日に,参加可能な妊夫カップルを対象としている。今年度は,パパプロ講座と同日の午後から7月7日,1月19日,3月19日の計3回日曜日に実施した（表2参照）。

前年度とほぼ同じ参加人数だが,経産カップルの参加が増えた分,上の子どもの参加人数が若干増加した。パパプロ講座に引き続くランチ交流会からほぼ全カップルが参加しているため,パパプロ講座参加の男性とも交流が容易となり,さらに先輩カップルとの情報交換,子育て体験ができる機会となっていた。参加者の男性は出産後パパプロ講座参加へ,女性の多くは支援事業への継続参加につながっている。行政区での沐浴体験事業が減少する中,次年度もさらに広報活動を活発にし,助産師会館での参加者増加を目指す。講座に協力できる会員の勧誘も必須である。

表2 H25年度 妊夫講座参加者数

	開催数 (回)	出産前				出産後			学生	合計
		妊夫	妊婦	祖母	子	産夫	産婦	子		
H25年度	3	6	6	1	4	3	3	6	3	32
H24年度	3	6	6	1	0	3	5	5	2	28

4) 事業⑧ パパも育児のプロになる（パパプロ講座）家族のためのハッピー講座

今年度は事業開始3年目となり,事業計画通り年3回の日曜日,平成25年7月7日,平成26年1月20日,3月9日に開催した。参加人数は,表3の通り,1回の参加者6組~8組で,ランチ交流会参加のママを合わせると合計73名参加と昨年に比べ若干増加している。

内容は回ごとに工夫を凝らした。第1回はわらべうたベビーマッサージに新しい講師を迎え,参加者

8組、子どもの年齢は大半3ヶ月～2歳までだが、年齢の高い子も一緒に楽しめる内容となった。第2回は、男性保育士協力により、男性ならではの体を使った遊びを中心としたわらべうたや絵本、パラバルーンを加えた内容とし、リピーターを確保できた。第3回は、現在4歳の子育て中の男性児童館職員の協力により、保育士とはまた一味違った父親目線での関わりが繰り広げられ、男性自身も楽しむ様子が伺えた。コミュニケーション講座や交流会を通じて、回を重ねるごとに男性同士も仲良くなれる場となってきている。アンケート結果より、満足度は高く、次回の参加を希望する内容が多かった。ランチタイムは、年々参加者が増加し、家族ぐるみで他の家族と交流する機会が増加している。次年度は日時の設定と外部講師の内容も充実させて、新規の参加者増加を見込む予定である。

表3 パパプロ講座参加者数

	開催数	パパ	乳幼児	ママ	学生	合計(人)
H25 年度	3 回	22(1)	28(3)	(20)	3	73(24)
H24 年度	2 回	18	20	(16)	3	57

()内はランチ交流会のみ参加

5) 事業⑨ 多胎育児支援(えんどう豆の会)

(1) ツインズ通信第74号テーマ「双子でよかったこと」夏号を8月に第75号 テーマ「私はこうして乗り切った&三つ子ちゃんの育児」冬号を1月に発行した。またHPに掲載した。

(2) 紙媒体による通信配信からメルマガ配信に変更となりメルマガを4回配信した。メルマガ登録会員数57名。

(3) えんどう豆ちゃんたちのファミリー教室を会館で6回(4月は2回完結型、8・10・12・H26年2月は1回完結型)開催した。保健センターや助産師からの紹介での参加が多く、妊婦10名、夫4名、子1名、実母2名、義母1名の延べ18名の参加であった。先輩講師や参加者の募集方法など、次年度も検討が必要である。

(4) 無料妊婦家庭訪問・産後家庭訪問を実施した。10月に『平成25年度京都府子育て支援特別対策事業費補助金』を受けることができた。京都府内全域では42件(京都市内は23件)訪問を実施。内訳は初産婦37名、経産婦5名。妊婦家庭訪問3件、産後家庭訪問は39件。妊娠期から産後まで継続した訪問は5件であった。アンケートを実施し、以下のような結果が得られた。

①訪問時期は妊娠20週前後、産後は4日目から1年7か月と様々であった。「希望時期にあわせてもらえる」「訪問時期はちょうどよかった」という声から、各時期の訪問が必要で、対象の希望時期に訪問が実施できた。

②訪問時の指導内容の中では、母親に関しては「育児や精神的なこと」「乳房ケア」「多胎育児全般の家族へのサポート」が役立ち、児に関しては「2人の違いや児の体重や発育」「同時授乳」「授乳に関すること」が役立ったようであった。

③自由回答では「多胎育児がこんなに大変とは思わなかった」「多胎をよく知っている専門家の訪問はありがたい」「訪問を受けなければ、安静の必要性や程度がわからず、動いていた」「出かけることが難しかったので助かった」などの声があった。リスクの高いケースでは、助産師と保健師との同行訪問を実施できた。利用者は、一回の訪問で二人の専門家の支援を受けられるメリットがあった。支援者側にとっても支援方法や技術を相互に学ぶことができ、とても有効な方法であったと考える。今後も病院や保健センターなど関連機関との連携を考えた支援のあり方を検討していき、財政面の努力を重ねることで無料の多胎家庭訪問を継続する計画である。

(5) ツインズ通信の読者を対象(280名)にアンケート調査を実施し、今年度末には、86通の回答を得た。「双子でよかったこと」「役だったこと」など集計結果の記述式回答の一部はツインズ通信で紹介した。7年前のアンケート結果との比較では、ネット情報の活用や行政のサービス向上が認められ、家庭訪問のニーズが高いことがわかった。平成27年5月開催の第71回日本助産師学会発表に向けて

集計結果の考察を重ねた。

(6) 東山保健センターの「多胎育児支援の勉強会」に講師として参加した。現在、地域によっては保健師と助産師の同行訪問が行なわれている。保健師からは、多胎妊婦訪問での対応の仕方、困ったケースなどの質問があり、アドバイスを行った。今後の助産師と保健師との連携の在り方を検討する機会となった。

6) 事業⑩ ベビーマッサージおこしやす広場「びかぴか」

ベビーマッサージを通して、出産後初めて赤ちゃん連れで安心して出かけられる場所として、助産師会館では年間24回開催し、延べ44組の親子が利用された。出張による広場は京都市内の児童館で2回開催し、延べ35組の利用があった。出張形態の広場開催は参加者の確保がなされており、ベビーマッサージを通して参加者間の交流や育児相談を行うことができ、育児不安の軽減には効果的であった。妊婦対象の事業(マタニティヨガ、プレママ講座など)に、参加者が引き続き産後の事業にも参加しやすいように心がけた。充実した学生実習のためにも、開催一回あたりの参加人数を増やすことが必要である。今後もホームページへの活動掲載など地道な広報活動や、初回無料クーポン券の発行など仲間同士で参加しやすい環境作りを整えたい。

7) 事業⑪ 妊娠・出産・育児サポート事業(スマイルベビー)

開催して5年目となる今年度は、高浜町地域の母子に事業の存在が浸透し、毎回20~30組の妊産婦が参加している。(高浜町年間100人の出生数)参加者延べ人数は、妊婦47人、産婦256人で、昨年度の妊婦52名、産婦264名より若干減少しているが、一定の参加人数は確保している。昨年より続いている食育の調理実習や妊婦体操などにニーズがうかがえる。

参加者は外出しにくい冬場は減少するものの、産婦も妊婦も安定した参加者がある。参加者の参加動機は交流や友達作り、妊娠中の体操、運動、お産や産後の生活についての相談がある。妊娠中に友達になり、誘いあいスマイルベビーに参加する姿も見られた。年度の終わりには、新年度を迎えるにあたり、仕事復帰するかたのニーズもあり、「卒乳と子どもを保育園に預けることについて」子育てワンポイントアドバイスのテーマに追加した。次年度は施設から地域に出た新しいメンバーも加わり、助産師にも地域での仕事の学びの場になっている。

3 事業⑫ 多世代育児支援事業【いきいき孫育て講座】

講座開催の実績は表4のとおりである。昨年の実績より受講者のニーズは個別性が高く、今年度は講座以外に小人数のカフェを開催した。参加者からの感想は良かったが、広報が行き届かず、会館と福知山の2か所で6回開催したが、参加者は8名だった。来年度は開催回数を縮小して継続させたい。地域で子育て支援をしている児童民生委員会から講義の依頼があり開催した。好評であり今後も地域の支援者とのかかわりを大切にしていきたい。昨年に続き、百貨店などが主催の講座は集客力があり、受講者を多く確保できるため、今後も協力して積極的に開催していきたい。

当会主催	講座数	受講者数(延)	備考
京都府助産師会館	2	9	京都府地域力再生交付金事業
亀岡ふらっとHOUSE	1	3	〃 NPO法人亀岡子育てネットワーク共催
舞鶴中文化会館	2	18	京都府地域力再生交付金事業
福知山くく助産院	1	10	〃
出張依頼・共催			
高島屋 洛西店	2	13	(公社)日本助産師会事業
高島屋 四条店	2	23	〃
西京下津林湧昇閣	1	19	川岡東児童民生委員会事業

4 事業⑬ 出張型性教育事業【いのちのふれ愛講座】

今年度は京都府助産師会からは述べ13団体の学校,児童館などへ出張講座を行った。

対象者は小学生1校,中学生5校,高校生6校,PTA 保護者向け1校であった。(図5) 会員個人が依頼されて実施している出張講座は年々増加している。(図6)

また8月には「夏休み親子いのちのふれあい講座」を行い12組ペア述べ25人の親子ペアに講座を行った。学校で,助産師が講座を行うことは,子供たちや保護者に「命をたいせつにする」ことへの効果をあげることが期待できる。

図5 出張型性教育講座実施回数(支援センター)

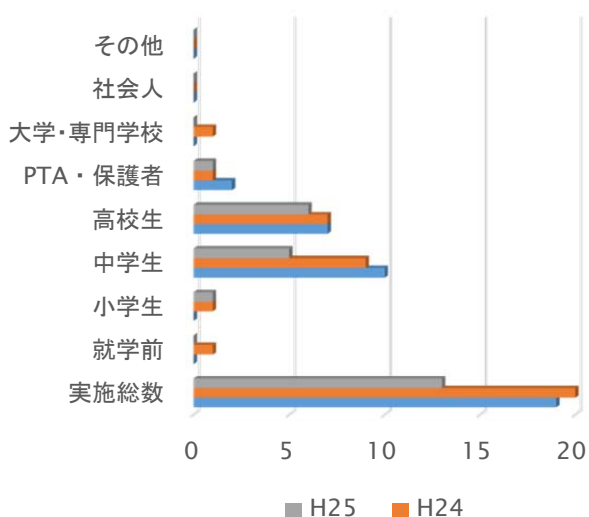
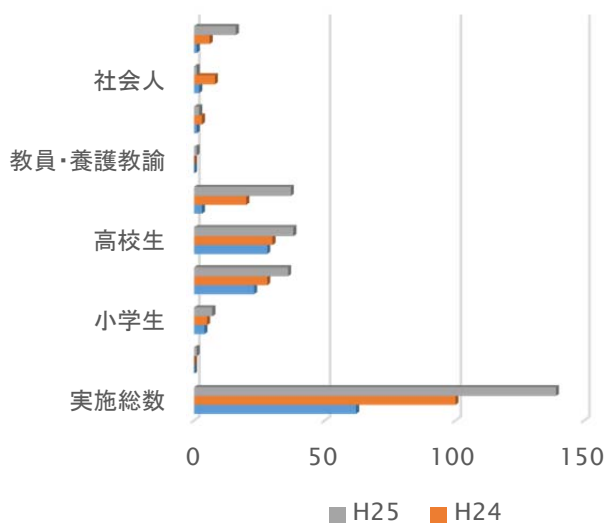


図6 出張型性教育講座実施回数(個人)



しかし,学校予算等の事情もあり近年依頼が減少してきており,講座依頼できる学校が限られている。(表5) 会員個人が対応する講座依頼は年々増加していることから,講座の需要は高いと思われる。

このため,次年度から助成金などを用い「いのちのキャラバン隊」プロジェクトを発足させ,より多くの学校や子どもたちに講座を行っていききたい。

	センターからの出張講座			会員個人の出張講座		
	H25	H24	H23	H25	H24	H23
実施回数(回)	13	20	19	139	100	62
受講者数延べ(人)	2164	3192	3419	9968	8667	7165

II 事業⑭ 助産師再スタート事業【潜在助産師再就業促進事業】

1 研修会について (実施内容は後述IIIを参照)

研修会の企画においては,助産師としてのスキルアップを目指す上で,興味関心を持ってもらえる内容を検討し実施した。また,潜在助産師にとっても参加しやすい内容を考慮した。しかし,支部単位での研修会では,潜在助産師の参加が得られたが,教育委員会主催の研修会に関しては潜在助産師の参加は得られなかった。就業の有無に関わらず,双方がより積極的に参加できる研修内容に課題を残した。

昨年度に引き続き,研修会への学生の参加を促した。国家試験前の時期と重なる設定では学生の参加は困難であり日程設定には限界が生じた。

2 医療機関,助産所,助産師会等における実務研修

*実務実習を受けた延べ人数 総計40名

①助産所での実務研修（助産院）2名 妊婦健診，講座，分娩・産褥入院の見学等
（出張開業助産師）妊婦健診訪問の実際等（延べ6名）

②助産師会が主催あるいは後援する事業についての研修

いきいき孫育て講座2名，多胎育児支援事業「えんどう豆ちゃんたちのファミリー教室」1名
育児講座1名，助産師サロン2名，マタニティヨーガ3名，妊婦講座実4名
ミッドワイフ道場10名，パパプロ講座3名

北部：ミッドワイフ道場1名，いきいき孫育て講座3名，育児支援事業3名

助産師の活動を身近に接することで，助産師の状況に応じた役割を知るとともに，妊婦の立場に立った細やかな支援方法を学ぶことができた。また，担当助産師と意見交換がゆっくり行えることで，仕事復帰にむけて抱えている不安の解消，問題解決の糸口を見つけることができた。

3 就業電話相談・就業への支援

助産師再スタート相談（電話・メール・面接による相談）を月～金曜日の10:00～15:00（6月1日～3月末まで）おこなった。相談件数は実人数14名であった。

4 実務研修・就業相談後の状況

【再就業者数】

助産院（分娩取扱い）：1名（お産の待機）

出張開業予定：1名

新生児訪問事業（伏見区）：1名

医院：2名

病院：1名（県立奈良病院）

就活中：1名（ナースセンターの情報をもとに希望施設を決定）

当会としては様々な支援事業を京都府全体で展開するなど，広範囲で潜在助産師への働きかけを継続した。今後も京都府全体を考えた事業展開を継続し，各地域での助産師活動の活性化をはかることで，潜在助産師の再就職促進につなげたい。

III 指導，教育，研修会事業

1 事業⑮ 定期研修会の開催

【第1回研修会】

日時：平成25年8月24日（土）13:30～16:30

会場：綾部商工会議所

講演：最新の予防接種の種類とスケジュールについて

— 生後2ヶ月からのワクチンデビューに向けて —

講師：竹内 宏一先生（竹内小児科医院 院長 小児科医）

参加者：参加者：会員12名，非会員17名

日本助産師会継続教育ポイント1点取得

予防接種の指導は，助産師の指導の中でも重要なウエイトを占めている。近年の予防接種の種類とスケジュールは，数年単位で動きがあり十分に理解する必要がある。今回の研修会では，最新の情報をもとにわかりやすい講義であり有意義な研修会であった。

【第2回研修会（公社）日本助産師会 近畿地区研修会として開催】

日時：平成25年10月19日（土）・20日（日）

会場：京都府立医科大学 図書館ホールほか

	講 演	講 師
10/19	行政から助産師へのメッセージ ～すべてのこどもの笑顔のために～	京都府健康福祉部こども政策監 京都子育て支援センター長 松村 淳子
	助産師に必要な倫理	(公社) 日本助産師会 会長 岡本 喜代子
	科学の目で助産しよう	聖路加看護大学臨床教授 進 純郎
	今あらためて家族の「絆」を考える	立命館大学准教授 斎藤 真緒
10/20	助産師の視点で行う遺伝カウンセリング	大阪府立母子保健総合医療センター 遺伝診療科 三島 祐子
	産科医療事故を防ぐ為に	産科医療保障制度再発防止委員会委員 勝村 久司
	走れ, 助産師ボクサー	NTT 東日本関東病院 富樫 直美

(公社) 日本助産師会主催 近畿地区研修会として開催し, 2 日間で近畿地区から, のべ 231 名の助産師や学生が参加した。講演内容はそれぞれ参加者の満足度が高く, 大変好評であった。(会報参照)

【第 3 回研修会】

日 時：平成 26 年 1 月 25 日(土) 13:30～16:30

会 場：オムロン ヘルスケア株式会社

講 演：助産師に必要な禁煙支援の最新情報

講 師：高橋 裕子医師 (奈良女子大学大学院 保健管理センター教授)

参加者：会員 17 名, 非会員 2 名

喫煙の害についてエビデンスをふまえた解説と, 最新の禁煙支援方法について講義して頂いた。禁煙指導に関わる助産師にとって, 多くのことが学習できた。

【その他】

平成 27 年度 5 月開催予定の (公社) 日本助産師会主催第 71 回日本助産師学会のおもな運営担当として, 企画・講師交渉などの準備を始めた。引き続き次年度も開催に向けて学会運営を継続する。

2 事業⑯ 支援事業担当者養成のための講座【ミドワイフ道場】:(会館) 10 月以外の月 1 回年合計 11 回開催 (南部出張 1 回含む), 北部 2 回開催, 毎回違うテーマで参加型の少人数の講座を開催した。(別紙 1 参照)

今年度から南部地域で新規開催し, 普段会館には遠くて参加しづらい会員や非会員も参加できた。北部 12 月は助産院見学と観光ツアーをセットした企画だったため, 市内からの参加数が大幅に増加した。

12 月と平成 26 年 2 月には, 会館では初の助産師以外の講師を試み, 参加者増加に貢献できた。例年通り, 「訪問」や「電話相談等コミュニケーション関連」の潜在助産師のニーズの高い講座には非会員の参加が多かった。

次年度も, 北部および南部での出張開催と助産師以外の専門職の講座を継続し, さらに潜在助産師の参加を見込めるテーマを企画している。

3 事業⑰ 学生指導・教育

1) 学生実習については, 表 6 のとおり昨年度より 2 校増加した 4 校 (看護学専攻 2, 助産科 1, 社会福祉学部 1) を受け入れた。実人数計 163 名 (うち男子 22 名) を指導した。事業別の実習は計 8 回, 実習延べ人数は 262 名 (うち男子 22 名), 内訳は表 7 のとおりであった。その他実習以外での自発的な参加及び見学としては, 研修会, ミドワイフ道場, 男性向け講座 (妊婦講座, パパプロ講座), マタニティ&親子ヨガ, 孫育て講座などがあつた (各事業報告参照)。指導者側の事業担当者にとっても, 学

生の真摯な態度は、日頃の対応を見つめ直すために大変刺激を受ける機会となっている。大学・専門学校からの会員個人への講義依頼も増加し、地域と教育現場との連携も広がりつつある。

次年度は、さらに新規に看護大学1校の実習受け入れが決まっている。さらなる助産師会での学生教育・指導の機会が広がるであろう。それと同時に、受け入れ側である当会の助産師は、指導者としての資質の維持、向上を求められている。

表6 H25 年度 学生実習学校別内訳

実習期間	学校名	学部学科	実習人数(男子)	内容
5/8~9/25	京都府医師会看護専門学校	看護学科2年課程	73名(13名)	母性看護学実習
7/1~9/29	洛和会京都厚生学校	助産学科	20名	地域母子保健実習
10/1~12/6	京都大学	医学部人間健康科学科看護学専攻3回生	56名(5名)	母性看護学実習
9月25日	佛教大学	社会福祉学部2回生	14名(4名)	子育て支援、会館での取組
計	大学3, 専門学校1	助産1, 看護2, その他1	163名(22名)	

2) 学生研究への協力

学生への研究協力は、以下3件であった。うち2件は、学生の視点からの助産師自身の卒後教育や地域活動に関連するアンケートであった。大学内での卒業看護研究発表会にて口演されているが、是非今後学会等での発表を期待している。

1. 『マタニティマークに対する意識と使用状況：産後1年以内の母親へのアンケート調査』

京都大学医学部人間健康科学科 看護学専攻助産選択課程

2. 『思春期に求められる助産師のかかわり』京都大学医学部人間健康科学科 看護学専攻4回生

3. 『助産師の卒後教育に対する意識と現状』京都大学医学部人間健康科学科 看護学専攻4回生

表7 事業別見学実習担当回数及び参加延べ人数

曜日	事業名	回数(回)	実習延べ人数(男子)
月	マタニティ&親子ヨガ	17	50(4)
	オリエンテーション	1	20
水	無料体重・身長測定	25	78(10)
	ミニ講座	24	72(6)
木	ミドワイフ道場	1	3(0)
	助産師さろん	1	4(0)
金	ベビーマッサージ	13	36(2)
	計	82	262(22)

IV 事業⑱ 会議室等貸室事業

主として、当会会員の子育て・女性健康支援を目的とする個人活動の事業(エクササイズ・リラクゼーションクラス、親業コミュニケーション講座、母乳育児基礎セミナー、助産師さろんなど)に対して、会館の1階ホール、2階会議室を年27回賃貸し、事業を展開してもらうことで広く社会の子育てと女性の健康に貢献した。さらなる有効活用を目指したい。

V その他の目的を果たす事業 運営管理について

1 組織の強化

1) 新入会者の獲得 平成25年度末で会員数250名となった。新入会者は25名(勤務部会21名,保健指導部会4名)であり,主に看護・助産教育に携わる勤務助産師であった。学生実習の受け入れや非会員への研修会・交流会の参加呼びかけ,賠償責任保険の加入が契機となった。

2) 技能上達のための小研修を含めた専門部会,支部交流会の活動

《専門部会活動》

(1) 助産所部会:安全・安心・安楽な出産ができる環境を整えることを目標に活動した。全国分娩基本データ収集システムに対象の助産所全11か所が加入し,迅速な報告に努めた。平成25年の分娩数は79件,転院・搬送数は20件(内,緊急は3件)で助産業務ガイドラインに従い正しい判断で早めの対応が出来た。また定例会では毎回事例検討を行い部会員間で学び合った。8月には,2年ぶりに分娩を取り扱う開業助産師リスト「京都開業助産師マップ」を改訂し,府内の嘱託医療機関や保健センターなどに配布した。周産期医療連絡協議会加入に向け,府へ要望書を提出し医療機関へ連携依頼をしたが,緊急母体搬送に関しては,嘱託医を介さず助産所からの直接依頼では受入れられ難い状況であり,今まで以上に嘱託医療機関との連携に努める。年1回の監査を実施,部会員以外の立ち合いはできなかったが安全対策委員が中心となり,重要事項は年度末までに改善された事を確認した。研修会を主催,また府・市及び各種団体の研修会,学校教育(看護学校,助産学科授業や臨床実習,性教育など)子育て支援事業へ講師などとして各々が参加した。

(2) 保健指導部会:①(公社)日本助産師会 部会集会 年3回開催:徳島県,京都市,東京にて開催され,京都府の部会活動報告をおこない,産後ケア・支援や継続した母乳育児支援についてグループワークに参加した。産後ケア・支援はすでに実施されている県もあり情報交換ができた。他府県においても,それぞれの地域で行政と連携して取り組んでいくことが必要である。2月は当会の部会集会を開催し,活動状況の報告とヒヤリハット・事故事例集を用いて事例検討をおこなった。

②勤務部会合同主催研修会 7月開催:テーマ「母乳育児確立へ向けての支援」講師:宮下美代子先生 参加者114名(助産師61名,非会員助産師21名,学生32名)で参加者のニーズに合った講演内容で参加者も多く関心が高かった。今後も母乳育児支援に対して研修を継続していく必要がある。

③地域における医療安全対策の強化:安全対策委員会の一員として活動をおこなった。(P14.安全対策委員会参照)また合同で,「京都府助産師会版保健指導安全管理評価表」を作成中で,完成後は部会員に自己評価をしてもらう予定である。今後も医療安全への意識向上を図っていくことが重要と考える。

(3) 勤務部会 勤務助産師の資質向上のための研修会として,7月6日『乳腺炎』研修会を保健指導部会と共同で開催した。(上記保健指導部会②参照)中支部と合同での研修会は開催できなかったが,10月19・20日に開催された(公社)日本助産師会近畿地区研修会では,短時間であったが部会交流会を持つことができ情報交換の場となった。研修を契機の入会者はなかったが,助産師の資質向上のための充実した研修を開催することで会のアピールができた。年間を通して勤務部会では入会者21名を確保した。

《支部会活動》

(1) 北支部 3月8日昼食を兼ねて交流会を行った。9名の参加があった。それぞれの会員の現在の活動報告をおこなった。病院勤務会員,地域で活動している会員の情報交換の場となり,活発な意見交換の場となった。

(2) 東支部 9月20日にまこと助産院にて交流会を行った。5名が参加し,交流や支部活動につ

いて活発な意見交換をおこなうことができた。平成26年2月22日 昼食をとりながら交流会を行った。7名参加し、内1名は初めての参加だった。会員同士で交流を深め、情報交換できた。ただ、参加会員は限られており、次年度は参加会員が増えるような企画とこまめな広報を行い、支部活動が活発になるよう努めていきたい。

(3) 中支部 交流会を2回実施

8月に会館でグループワーク形式での交流会を実施。参加者は17名、子供4名の参加。また平成26年3月には「ソフトエアロとリラクゼーション」で身体を動かし、楽しみながら交流会を実施し、各施設間や地域、勤務助産師の交流を深めることができた。参加者は15名。今年度の支部目標である「虐待防止の学習会」は実施できなかった。

2回の交流会には、非会員や家族の参加もあり、会の活動や事業の広報活動の機会になり、会員獲得にも繋がったと考える。今後も各施設間の勤務助産師、地域助産師との連携を深める活動を行っていく。

(4) 西支部 8月11日支部交流会を開催した。(7名参加) 勤務助産師と地域で活躍する助産師との情報交換から母乳育児支援に向けての研修若しくはアンケート調査の意見があり理事会に報告した。母乳育児支援実態調査として教育委員が協力した。

2月22日高橋助産院見学で見学と交流会を開催した。(7名参加) 高橋助産師から助産院での分娩介助シーンの写真を見せて頂き、地域での助産管理等貴重な話を聴くことができ助産師として意識向上につながる有意義な時間をすごせた。

昨年に引き続き災害安否確認訓練、支部連絡網はEメールを中心にメールアドレス登録者が増えた。施設単位に連絡係を設けるかは検討中である。

(5) 南支部 平成25年1月26日に行う予定であった支部主催研修会(医療法人保科医院院長保科眞二先生による性感染症講座)が、講師の都合により延期になっていたが、同年9月14日(土)に当助産師会館にて開催出来た。当日午前中は支部交流会を行い、交流会参加者8名、研修会は30名の参加であった。また、平成25年2月より34名の登録により運用し始めた支部のメーリングリストは、支部会員全員の登録が無いことと、メールの不着が多く、メーリングリストサービスの廃止も決定したため、次年度には連絡や情報交換の手段として何らかの形で連絡網の整備にあたる予定である。

平成26年2月22日(土)には、今年度2回目の支部交流会を宇治市で開催した10名の参加者で「ヒヤリハット」情報の協力と、当会の運営特に来年に控えている日本助産師会の総会についての経過説明と参加協力、意見等を話し合った。

新規会員獲得については、勧誘は行っているものの退会希望者もおり、会員増にはつながっていない。連絡先や活動状況を把握できない会員が十数人いるため、交流の努力を今年度も続けていく予定である。

(6) 丹後支部 交流会、ミッドワイフ道場の北部開催、孫育て講座の北部開催をきっかけに、情報交換の機会が増えている。今年度はミッドワイフ道場の後に、みき助産院見学、天の橋立、温泉、カニツアーを開催し、京都市内の会員と北部の会員の交流を深めることができた。温泉、カニツアーは大好評で、次年度も楽しい企画を検討している。交流が深まる中、今年度3名の新入会者があった。

行政との連携も増え、今年度より舞鶴市の新生児訪問を委託事業としてはじめることができた。また、次年度より綾部市主催の「ぷくぷく広場」に助産師会会員の採用が決定した。

丹後支部で長年開業助産師として活躍された梅田さかえ先生を、平成26年度(公社)日本助産師会名誉会員として推薦できた。

2 健全な事業運営と効果的な広報活動

1) 運営委員会 : 年4回開催した。各事業の情報を共有し、事業運営やそれぞれの活動状況について話し合った。主な検討事項は、各事業への参加者増加に向けての参加費や人件費を見直し・マタニティ・親子ヨガとベビーマッサージの初回無料体験を期間限定で試験的に実施・利用者が多い水曜サロンの無料体重・身長測定の活動時間延長の決定・事業活動実態に合わせ、事業に伴う事務、会館管理作業の平均

化を検討・卒後3年目助産師の離職防止と地域と連携した母子支援ができる人材育成のため、「勤務助産師セミナー」の立案、理事会で承認などであった。

広報活動としては、関連団体等との事業開催広報は、案内チラシ配布やホームページのリンクやメールリストの活用などで互いの広報につなげた。

参加マニュアルを作成し、非会員の事業見学を積極的に受け入れ、少しでも多くの助産師に当会の活動を知ってもらうことにより、入会者の確保に努めた。

また、12月7日(土)京都市、公益社団法人京都市児童館学童連盟、京都子どもネットワーク連絡会議主催のやんちゃフェスタに参加し、出産や子ども健康相談コーナーにてブースを担った。孫育て事業、ベビーマッサージ、多胎事業、パパプロ講座などの事業ポスター展示、胎児人形の展示、クリスマスカードの作成、子育て相談を行った。人波切れることなくブースに立ち寄る親子、児童、多職種の方が来られ当会活動の宣伝になった。

2) 準備委員会：9月10日第1回準備委員会に5名出席し、主に慰霊祭・懇親会の企画と役割分担を検討した。

11月2日慰霊祭・懇親会を開催した。慰霊祭には21名参加。懇親会19名の参加があり食事をしながら会員同士の親睦を深める場となった。終了後の反省会では2年後行事に向け引き継ぎ事項をまとめた。会計については収益事業から法人会計に移動を検討事項として提案した。

現在5月17日京都府助産師会総会、平成27年度(公社)日本助産師会総会京都会場開催にむけ同様に運営準備に参加協同する。

3 助産師業務の事故防止・安全対策の充実 (安全対策委員会)

委員会は、会員の安全な助産業務の遂行を目的とし、今年度常設委員会となった。今年度の活動は、事故・ヒヤリハット事例を収集し検討、日本助産師会に報告したが、重大事故に繋がるような事例はなかった。また、1件のクレームに対し臨時委員会を開催、当該助産所にて聞き取り、改善策を提示後、再訪問し改善を確認し理事会に報告できた。3回の会議では会員の助産業務への安全対策にあたり、医療法・助産業務ガイドラインの周知徹底について話し合い、具体策の一つとして、既存の助産所安全管理評価表を元に保健指導の評価表の作成を決定、来年度からの運用を目標に作成中である。また、昨年度まで助産所部会を中心に行ってきた安全対策に関する研修会を、来年度は委員会主催で開催し、安全対策の知識向上に努め事故防止に繋げていく。万が一事故発生時には速やかに対応し、理事会と連携を取りながら事態収拾と再発防止に努める事を計画している。

4 防災活動への取り組み (災害対策委員会)

1) 近畿防災会議出席：3回/年開催。広域災害を想定した近隣府県助産師会との連携、協力を視野にいれ会議を行っている。

2) 京都府避難訓練参加：9月1日、宮津運動公園にて開催され、9名の会員が参加した。雨により途中、中止となったが、展示ブースにて、妊婦・赤ちゃんを持つ母親・女性への災害時の心構えなどについてのパネル展示、パンフレット配布、妊婦体験ジャケット・赤ちゃん人形・災害時用スリングなどを用いた体験学習、カップ授乳の実際を見せるなどの災害時の支援に役立つ情報提供を行い、助産師の活動を伝える機会となる。

3) 京都府災害時等応援協定ネットワーク会議の出席：4回/年開催。行政とのつながりを作り災害時に協力できる体制を作っている。

4) 災害ボランティア登録：今年度は30名の会員が登録した。

5) 助産師会館の避難訓練開催：10月30日、2月1日の2回開催した。会館で母子の事業開催中の火災を想定し訓練を行った。1回目は会員14名参加。第2回目は、会員10名参加し、西大路消防出張所

立ち会いのもと訓練を行った。

6) 第2回災害に対応する訓練（安否確認）の実施：2月1日に全国一斉に行われた。安否確認できた会員は59%だった。災害発生は予測不能であるという危機意識を常に持ち、会員同士の連携を築く事、災害時に助産師の人材確認をし、助産師が支援できる体制を整える事を目的に訓練を行っている。

7) 防災マニュアルの作成：現在作成中。京都市福祉避難所協定に向けた運営マニュアルについても今後検討していく予定である。

5 平成27年度（公社）日本助産師会通常総会および第71回日本助産師学会の準備運営

平成27年度上記の総会・学会が京都市内で開催されるにあたり、開催地として事務局を立ち上げ、日程、開催場所などを決定した。次年度も（公社）日本助産師会と連携しながら、準備運営を進めていく。

おわりに

平成25年度は、助産師の職能団体として、公益事業の効果的な活動とその内容の充実に努めた。特に行政や関連団体と協働・連携した事業の取り組みも進行中である。そのためにも組織強化をはかり、当会の活動が多くの市民に周知されることが今後もさらに必要である。

H25 年度 ミドワイフ道場参加人数

(別紙1)

北部開催：年2回 13時半～15時 ()内は京都府助産師会支部名

潜在助産師 ()

月日	テーマ	会場	師匠(講師)	会員	非会員	学生
6/26 (水)	新生児訪問の現状と課題について	福知山中央保健センター	福知山新生児訪問指導員 河田千恵子(丹後支部)	4	5	0
12/14 (土)	多胎児支援について	舞鶴市中総合会館5階 フレアス	元京都府助産師会副会長 森光孝枝(中支部)	17	1 (1)	0
合計				21	6 (1)	0

京都府助産師会館開催：毎月第2または第3木曜あるいは金曜 10時～11時半

潜在助産師 ()

日	テーマ	師匠(講師)	会員	非会員	学生
4/11 (木)	家庭訪問に自信をつけよう ～4月から始める方もベテランも初心忘るべからず～	当会保健指導副部長 出張開業 藤原朋子 (南支部)	10 (1)	0	11
5/14※ (火)	ワーク・ライフ・バランスを考える ～楽しく、無理なく、分娩取り扱い助産院開業への道～	みき助産院院長 当会理事丹後支部長 新宮美紀(丹後支部)	15 (1)	0	0
6/14 (金)	【南部開催】13:30-15:00 in 助産院しんかい 12:00～昼食会 助産院開業を目指すあなたへ～経営面、運営面で乗り越えるべき課題とは？～	助産院しんかい院長 元当会理事助産所部会長 新開幸代(南支部)	20	1 (1)	0
7/19 (金)	第2弾！電話相談のコツ教えます ～相手に寄り添うコミュニケーション技術を駆使して～	つきのわ親業ルーム 当会理事：会計担当 出張開業 中川淑子 (東支部)	8	2 (2)	0
8/8 (木)	思春期に花開かそう！ ～助産師ならではの生と性のお話～	当会監事 前当会会長 出張開業 岡本美由貴(西)	9	0	7
9/20◎ (金)	10:30-12:00 養育支援訪問事業(専門的家庭訪問支援)の現場から見える助産師の役割	出張開業 大阪府助産師会 安川裕子(中支部)	8	1	0
11/15 (金)	妊娠期からの継続的な関わりを大切に ～診療所でスタッフが生き活きと働くために～	ハシイ産婦人科師長 中谷朱美(西支部)	10	0	3
12/6▲ (金)	確定申告への準備できていますか？ ～税法改正に伴う記帳説明会&質疑応答～	下京税務署 税務職員	14	0	0
1/17 (金)	勤務助産師が抱えるジレンマ ～院外助産院(みのりの家)立ち上げから継続への課題	宮川友美(中支部)	13	2	0
2/8* (土)	14:00-16:00 NICU退院後の児とその家族を支援する ～NICUの現場から、施設と地域の助産師へ期待すること～	京都大学医学部附属病院 新生児集中治療部医師 IBCLC 道和百合	14 (1)	1	0
3/14 (金)	教育の現場から考える～地域、勤務、開業、肩書きを越えて、助産師が持っている力を最大限に発揮するために～	洛和会京都厚生学校助産学科 科教員 鈴江千鶴子 (東支部)	9 (1)	1	0
合計			130 (4)	8(3)	21

※：火曜日 ◎：10時半～12時 ▲：第1金曜 *：土曜日 14時～16時